

『和泉式部日記』『夜の寢覚』の「道芝」

菅原領子

一 はじめに

『和泉式部日記』（以下『日記』と略称）に、次の贈答がある。

……さまざまに思ひ乱れて臥したるほどに、御文あり。
〔宮〕露むすぶ道のまにく朝ぼらけぬれてぞきつ
る手枕の袖

この袖の事は、はかなきことなれど、おぼし忘れでの
たまふもをかし。

〔女〕道芝の露におきぬる人によりわが手枕の袖も
かわかず^(一)

『日記』の半ば過ぎ、「手枕の袖」をめぐる一連の贈答
の中に位置するものであるが、宮に応えた女の返歌に、「道
芝の露」なる歌語が見られる。

一方、『夜の寢覚』巻三には、次のような場面がある^(二)。

〔帥の君〕「〔帝は〕登花殿の上〔寢覚の上〕渡りた
まへりしに、御対面ありて、明け果つめりつ。今朝も、
いととく、かくてこそ」と言へば、「〔内大臣は〕胸ふ
とふたがりて、顔の色変りぬらむとおぼゆれど、「な
ぞの御対面ぞ。もし、総角か」と問ひたまへば、「〔帥
の君〕「さらなり。その程は、宣旨の君ぞ、くはしう
は、道芝にて知りたまひつれ。女の御様の、すすみざ
まなりける」と言ふに、「〔内大臣は〕とばかりものも
言はれず。…〔中略〕…〔宣旨の君〕「…〔帝は〕
『昔より心ざしの深き、登花殿に渡るたびごとに、み
づからときこゆるを、つれなくて聞き入れたまはねば、
かかる折にと、うかがひ参りつる』などこそおほせら
れつれ。そは、道芝要るべきことにもはべらざりつる
ものを」と、「うたて、総角までは」とおいらかに言
ひなすを、「〔内大臣〕「さのみはあらじ」と、から声
に問ひたまふも…〔後略〕…

内大臣の妻となつてゐる女一宮のために内大臣と寢覚の上との仲を割こうと謀る大皇宮は、帝がかねてより想いを寄せていた寢覚の上に逢えるよう手引きし、更にそれを内大臣の耳に入れて、内大臣が寢覚の上を厭うよう計らう。女房の帥の君から話を聞いた内大臣が、動転しながら「総角か」^{三三}——二人は逢つてしまつたのかと尋ねるのに対し、口さがない帥の君は、逢瀬があつたのはもちろん、寢覚の上の方が積極的な態度であつたと、あらゆる事を告げ口するのである。驚いた内大臣が更に宣旨の君に問うと、宣旨の君は最初からの経緯、帝が寢覚の上に語つたことなどを話し、「うたて、総角までは」と、寢覚の上の潔白を証した。

この、帥の君と宣旨の君、二人の女房の言葉の中にもそれぞれ「道芝」の語が出てくる。ここでの「道芝」は文脈から推して取り持ち役、或いは証人などの意と思われるが、日本古典文学大系（岩波書店）は「道芝が、どうして、道案内、あるいは取持ち役の意になるかはよくわからない」とし、講談社学術文庫は道芝が歌語である旨指摘した上で、「そばに居合せた者」「証人」と解している。新編日本古典文学全集（小学館）は頭注に『日記』の前掲歌を引き「路傍の芝草の意。ここでは、傍らに居合わせた者の意。そこから道案内、あるいは取り持ち役などの意も含むか。引歌があるが不詳。」とした上で、「道柴の露」を含む『狭衣物語』巻二の歌（後掲）を指摘している。更に、片桐洋

一氏『歌枕歌ことば辞典 増訂版』^{三三}「道芝」の項では、『日記』当該歌が後の文学に影響を与えた例として右の帥の君の「くはしうは、道芝にて知りたまひつれ」という言葉が引かれ、「諸註『くわしくは宣旨の君（という女房）が取り持ち役として御存知です』と訳しつつ、『道芝』がなぜ『取り持ち役』の意になるのかわからないなどと記しているが、当時、身分の高い男女は逢瀬のクライマックスにも侍女・童女などを侍らせていたことを想起すればわかるはずである。『草枕』のかたわらの『道』で、寝ずに『おきある人』だからである。」と説かれてゐる。また、より新しくは秋山虔氏編『王朝語辞典』^{三三}「道芝」の項でも、帥の君の言葉は『日記』当該歌の「おきある人」を引いて「寝ずに主人に近侍する宣旨のことを言」つたものと説明されている。

『歌枕歌ことば辞典』や『王朝語辞典』の説くところに従えば、右に引用した『夜の寢覚』巻三の場面は、『日記』享受の一側面として興味深いのだが、このことは果たして確かであろうか。「道芝」及び「道芝の露」という歌語について、いま一度その成立・影響を辿つてみたい。

二 『日記』に先行する「道芝」「道芝の露」

十一世紀後半以降、「道芝」は露或いは霜などと共に盛

んに詠まれ、「道芝の露」の歌句も多用されるようになったが、『日記』に描かれる長保五（1003）年当時、「道芝」及び「道芝の露」は歌語としてまださほど一般的なものはなかった。先行例を挙げてみよう。

①おもはずもあれかしあやなみちしばの人のふるせるわれならなくに（古今和歌六帖第四恋 ないがしる 2125）

②みちしばもけふははるるあをみはらおりあるひばりかくるへぬべみ（好忠集 三月をはり 83）

③みちしばのつゆにあらそふわが身かないづれかまづはきえむとすらむ（新古今集卷第十八雑歌上 1188 題しらず 清慎公）

④みちしばのしもよの月をふみならしふりにしみやこあれにけらしも（雲葉集卷第八冬歌 109 神無月のころならのみやこにて 三条右大臣）

いずれも『日記』に描かれるような恋、就中後朝の情趣とは無関係な「道芝」或いは「道芝の露」の用例である。③の歌は清慎公集には見えないが、藤原実頼詠ならば先行例として数えることができよう。④の歌は他出文献が当の雲葉集を出典とする夫木抄しかないため、確かなことはいえないが、作者の「三条右大臣」が藤原定方を指すとすればこれも先行例と言える。

次に、後朝に詠んだものを探してみると、次の例が挙げ

られる。

⑤きえかへりあるかなきかのわが身かなうらみてかへるみちしばの露（新古今集卷第十三恋歌三 1188 女の許に、ものをだにいはいはむとてまかれりけるに、むなしにかへりて、あしたに 左大将朝光）（小大君集 9 女の

もとにものをだにいはいはんとてきたりける人、あしたに）
⑥かひなくてありあけのつきにかへりなばぬれてやゆかむみちしばのつゆ（大式高遠集 12（詞書省略））

⑦葉末こそあきをも知らぬ根を深みそれ道芝のいつか忘れむ（うつほ物語俊蔭卷 若小君） 8

⑤は女の許を訪れたものつれなくされて、空しく帰った翌朝の男の恨みを詠む。⑥は長い詞書を持つ前の歌に続いているので詞書を省略したが、三人姉妹の許へそれぞれ通う男がいたが、ある夜男達が行き合ってしまった男の語らいもならず雑談などして帰ることになった男の歌である。これら二首はいずれも逢瀬が成立しなかった後朝の歌ということになる。⑦は、父を亡くして心細く暮らす俊蔭女にゆくりなく出会って一夜契った若小君（後の藤原兼雅）が、今後の逢瀬の難いことを言うと、俊蔭女が「あき風の吹くをも嘆く浅茅生に今はとかれむ折をこそ思へ」と詠み、それに応えた歌である。既に若小君が、両親の鍾愛の子である自分は気ままな微行もできないと繰り返して述べており、二人の仲がこの一夜の後長く隔たるのであることは暗

示されているのだが、浅茅生によせて若小君の夜離れを案ずる俊蔭女に対し、若小君は根を深く張った道芝に託してまた通ってくる約束している。

①の「ないがしろ」、②の叙景、③の無常観、④の懐旧と、後朝の情趣とは無関係な「道芝」「道芝の露」の用例がある一方で、⑤⑥⑦では「道芝」の「道」が女の許への通い路を示していることが明らかである。では次に、『日記』と同時代の用例をみてみよう。

三 『日記』と同時代の「道芝」「道芝の露」

先にも述べたように、十一世紀後半から十二世紀になると、「道芝」「道芝の露」は多用されるようになるが、『日記』と同時代と目される用例はやはり多くはない。次のようなものである。

⑧夏のひのあしにあたればさしながらはかなくきゆる道芝の露（和泉式部集24夏）

⑨みちしばやおどろのかみにならされてうつれるかこそくさまくらなれ（後拾遺集卷第二十雑六213三條院御時うへとのあすとてちかく侍ける人まくらをおとしてまかりいでにければかきつけて殿上につかはしける小大君）（小大君集23うへ、殿あすとて、おまへにちかくさぶらふ人人、あやしきくれのまくらをおとして

いでたるに、かきつけたるを、人人殿上にやりたり）
⑩みちしばのつゆうちはらひしるべする人をいづれのよにかわすれん（重之子僧集28おぼつかなきみちのしるべする人のわかるるところにて）

⑪あさまだき人のふみゆく道しばのあと見ゆばかりおけるしもかな（故侍中左金吾集79初雪）

⑫数ならぬ 道芝とのみ 嘆きつつ はかなく露の起き伏しに……（采花物語卷第九いはかげ 左衛門督の北の方）

⑧は和泉式部詠に見られるもう一つの「道芝の露」の用例であり、注目される。⑨は「道芝」を寝乱れ髪の喩えとし、草枕の「草」に「臭」をかけるという、誹諧歌的な要素の強い歌である。⑩は「重之の子の僧」が伝未詳であるが、源重之の没年（長保二（1000）年）から考えて、『日記』と同時代の例としてよいであろう。⑪は長久三（1042）年の題詠である。題は恐らく「初霜」の誤写であろう。⑫は「いはかげ」の巻末に長歌の贈答がある、その贈歌であるが、実のところその作者「左衛門督の北の方」なる人物は、新編日本古典文学全集（小学館）の頭注によれば史上該当する人物がおらず、詠歌時期自体も「いはかげ」が描く一条院崩御の頃なのかどうか不確かなのだが、ひとまずここに掲げておく。

これら同時代詠にも、恋の情趣を詠んだものは少ない。

⑧ははかない夏の景物であるし、⑨は戯れの比喩である。

⑩は詳しい事情は不明だが、よく知らぬ道を案内してくれて別れた、というのだから、恐らく恋愛とは無関係であろう^三。⑪が早朝に道芝を踏んでゆく人、というので、後朝らしく思われる。⑫は数ならぬ身、にかけて、つまらぬ、取るに足りないものとして「道芝」を詠んでいる。

こうして見てくると、『日記』当該歌の「道芝の露」は、『小大君集』『大式高遠集』『うつほ物語』『俊蔭』に先蹤はあるが、比較的早い時期に後朝の情趣を表す景物として詠まれた例であることが確認できる^四。

四 後代の「道芝」「道芝の露」

では、後代多用される「道芝」「道芝の露」は、どのよう^五に詠まれているのか。十一世紀後半から十二世紀初頭にかけたの例をみることにする。

⑬みちしばやつゆふみわけてみしほどにあふよのそでもぬれにけるかな（江帥集^二88をんなのもとよりかへりて、つとめて）（後葉集卷第十三恋三364題不知大

藏卿匡房 初句「みちしばの」三句「こしほどに」

⑭をみなへしにほへるのべをたづぬとてぬれこそきたれみちしばの露（在良集^二「秋日於遍照寺詠野径尋花」

⑮みちしばにすておかれぬるつゆの身ははちすのうへも

いかごとぞおもふ（成尋阿闍梨母集^二）

⑯みちしばに霜やおくらむさ夜更けてかた敷く袖のさえまさるかな（堀河百首^二22霜 源頭仲）

それぞれの歌において後朝、秋・冬の景物、無常観を、「道芝」「道芝の露」が表している。右の⑬⑭⑯も含め、十一世紀後半以降平安時代末までの和歌における「道芝」「道芝の露」が、どのような意味を担って使用されているかを調べると、次の通りである。

○道芝

- ・ 恋（主に後朝）の情趣…8例
- ・ 景物（夏・秋・冬）…9例
- ・ 無常観（露を伴って）…2例
- ・ 哀傷（虫を伴って）…1例

○道芝の露

- ・ 恋（主に後朝）の情趣…14例
- ・ 景物（秋）…5例
- ・ 無常観…5例
- ・ 別離…1例

秋や冬（夏歌も一首あり）の景物として詠み込まれ、またはかなさを示す露と共に無常観を表しているのは当然であるが、恋（主に後朝）の情趣の表象としての使用もまた、定着した観がある。そうして新古今時代以降は、枚挙に暇がないほど、歌語「道芝」「道芝の露」の使用は盛行する

のである。その中から、幾つかの用例をみてみたい。

①問ふ人もあらし吹きそふ秋はきてこの葉にうづむやど
のみちしば(新古今集巻第五秋歌上515千五百番歌合
に 皇太后宮大夫俊成女)

②思ひ入る恋のみちしば秋過ぎてとはでかれぬる草の原
かな(後鳥羽院御集 詠五百首和歌 恋百首99)

③こととひし庭のみちしばうらがれて霜よりさゆる冬の
よなよな(千五百番歌合178公経)

④たづねてもたれにとはまし草の原なつはあとなきみち
しばの露(雅有集 百首和歌 夏62夏草)

「道芝」「道芝の露」が、「とふ」「こととふ」の語と共に
詠まれている。これは、③④から明らかにみてとれるよう
に、『狭衣物語』巻二冒頭の歌、

たづぬべき草の原さへ霜枯れて誰に問はまし道芝の
露(十)

を踏まえていると考えられる。この「たづぬべき」歌中の
「草の原」は更に(六百番歌合の俊成の判詞「源氏見ざる
歌よみは遺恨の事なり」で有名であるが)『源氏物語』「花
宴」の朧月夜詠「うき身世にやがて消えなばたづねても草
の原をば問はじと思ふ」を踏まえている。巻一に登場し
た飛鳥井女君は、主人公狭衣の子を懐妊しながら行方不明
となっており、未だに彼女の素姓さえ知らない狭衣が、女
君を想って独詠したものである。女君とは路上で不審な女

車を見咎めるといふきっかけで出会ったもので、その身分
もあまり高くないから、自分の前からはかなく姿を消してしまつた彼女を「道芝の露」と詠んでいる。

朧月夜は草の原を問うてはくれないのか、と詠んだが、そ
の草の原さえ霜枯れたいま、「道芝の露」の行方を誰に問
うたらよかるうか、というのであり、この後飛鳥井女君は、
物語中でも後世の読者からも繰り返し「道芝」「道芝の露」
と呼ばれるようになる¹¹³⁾。しかし⑦⑧では、「道芝」が
直接「とふ」対象となつていているようである。そのことは、
「いたづらにくさははしげるころなれどそなたとふべき道
しばぞなき」(親清五女集269う月のころ、ひむがし山な
る所にしばし侍りしに、そこをしりたる人のはべらで、心
よりほかにいぶせき日かずのつもりぬることなど申しおこ
せ侍りて、おなじ人)、「わけしよの契りも消えてかなし
きはとへどこたへぬ道芝の露」(院御歌合宝治元年186逢
不遇恋 俊成卿女)、「古郷は人目もかるる道しばを誰に
とひてか冬のきぬらん」(文保百首352 昭訓門院春日)な
どから、よりはっきりとみてとれよう。「道芝を」(につい
て)とふ」と「道芝に(何かを)とふ」の、いずれの表現
もあり得たことが窺われるのである。

五 しるべとしての「道芝」

ここで、⑦の『うつほ物語』若小君の詠に戻る。「えしも思ふままにはまうで来じを」「もし、心ならで参り来ずとも」「さらに、心にては、夢にても疎かなるまじけれど、参り来むことのわりなかるべきこと」といった若小君の言葉を受けて、俊蔭女は「今はとかれむ折をこそ思へ」と、若小君が離れてゆくことを案じた。それに対し若小君は、しっかりと深く根を張った道芝のように自分の愛情は堅固なものであり、通ってくる道も女君への志をも忘れはしないと誓うのである。続けて、「さりととも、かくてやむべきにもあらず」とも言っている。忘れはしない、このまま二人の仲を終わらせてしまおうとは思わない、とは、少々頼りなくはあるが俊蔭女詠の「今はとかれむ」ことの否定、今後も通つてこようとの意思表示であろう。それを支えるのが深い愛情、「道芝」なのである。

この「道芝」の語は物語中に再び登場する。「蔵開中」巻である。仲忠は、蔵を開いて手に入れた父祖伝来の書籍を帝に進講するため、四日間宮中にとどまって帰宅しない。その間愛妻女一宮に手紙を送るが、使いに立った童の宮はたが、女一宮からの返事を帝が臨席している場へ堂々と持ってきてしまい、仲忠はきまりの悪い思いをする。翌日も同様に宮はたが、涼や季英、行正のいるところへ女一宮の手紙を持ってきて見せびらかすので、涼がたしなめると、仲忠は「今日は、いとよしや。昨日、御前にて、かくした

りしこそ、道芝なかりしか」と言う。今日はずっとましてある、昨日帝の御前でこのように振る舞ったのこそ、に続くのだから、「道芝なかりしか」は、困った、どうしようもなかった、等の意であろう¹⁵⁸。⑦の歌では「道芝」は俊蔭女の許へ通う道であり、また、今後も通うことを支える深い志であった。一方ここでの「道芝」は為す術、具体的に帝の御前で見苦しくなく振る舞う方法、ということになる。いずれも何かを行うためのよりどころ、という意味では一致している。「道芝」は道に生えているものだけに、道の所在を示すもの——しるべの意味にもなるのであろう。

よりどころ、しるべとしての散文中での「道芝」は、この『うつほ物語』や先に引いた『夜の寝覚』の例以外にも登場する。一つは『風につれなき』¹⁵⁹である。

内裏には昔の御悲しみも、隔たるままにはさすが薄らぐに添へては、夢のやうなりし面影ぞ、いよいよ恋しく堪へがたく忘れわびさせ給ひつつ、御匣殿の女大納言の君、をかしき容貌に御覧じつきて、もののためはせなどせしかば、忍びて古里へ恨み尽くさせ給ふ道芝にと、いみじう語らはせ給ふ。

中宮亡き後、帝は昔宮中で仄見た中宮の妹姫が忘れられず、何とか想いを通じようと中宮の侍女で妹姫とも縁続きの大納言の君を頼る、という場面である。「道芝」は文を通わ

せるためのよりどころ、しるべとして用いられている。

もう一つの例は、『とはすがたり』巻一^下である。

……いと物すさまじき心地しながら、まがよひぬたり。御夜離れと言ふべきにしあらねど、積もる日数もすさまじく、又参る人の出だし入れも、人のやうに子細がましく申べきならねば、その道芝をするにつけても、世に従ふは憂き習ひかなとのみおぼえつゝ、とにかくに、「又此頃やしのばれん」とのみおぼえて明け暮れつゝ、秋にもなりぬ。

後深草院の寵を受けるようになった作者は改めて院の許へ出仕するが、その寵愛がうちしきるといふわけでもなく、その上心安い女房として、夜、他の女性が院に侍する際のしるべまでさせられる。「道芝」は院の許へ女性が出入りするための案内・世話役である。

『夜の寝覚』の帥の君の言葉「宣旨の君ぞ、くはしうは、道芝にて知りたまひつれ」は、宣旨の君が帝と寝覚の上の傍に侍していて顛末を見届けた人であるとも、また宣旨の君が帝を引き入れた案内・世話役であるとも、両様に解される。一方、宣旨の君の言葉「……などこそおほせられつれ。そは、道芝要るべきことにもはべらざりつるものを」は、(帝がこのように寝覚の上に想いを告げられただけのこと、帝と寝覚の上の間には何事もなかったのだから、)内大臣がわざわざ一部始終を見届けた者などお探しになる

必要はありませんでしたのに、とも解し得るが、少々迂遠な気もする。大皇宮が寝覚の上に対面を求め、一方で帝も物陰に呼んでおいて話をしているうちに、帝が思い余って出て来て寝覚の上に想いを告げたのだという経緯を説明した後での言葉であるから、このようにもとより大皇宮が計らったことであり、手引きが必要となるような色めいた対面でもありませんでしたのに、と解する方がより直接的でわかりやすいように思われる。

『風につれなき』の「道芝」は文を通わせるための仲介役であり、傍に侍する者の意ではないし、『とはすがたり』の例も「参る人の出だし入れ」の「道芝をする」のだから、案内する、世話するの意であろう。『夜の寝覚』『風につれなき』『とはすがたり』いずれの道芝も、『日記』の「おきぬる人」——傍に侍する者——を経由しなくても、しるべの意で通じるし、それは『うつほ物語』のしるべ、よりどころとしての「道芝」につながっているように思われるのである。

六 おわりに

「道芝」「道芝の露」は十一世紀後半以降盛んに使用された歌語であるが、『日記』の時代にはまださほど一般的でありふれたものではなかった。『日記』の「道芝の露」

は帥の宮の歌の「露むすぶ道」を受けて詠まれたものであるが、「道芝の露」を詠んだ後朝の歌としては、早い時期のものの一つと教えられる。また、和泉式部集にははかなく消える夏の景物としても「道芝の露」が詠まれており、式部は前・同時代の歌人よりはこの語を好んだと言えよう。

『日記』よりやや遅れ、特に新古今時代以降、「道芝」「道芝の露」は多く詠まれるようになるが、これは何と云っても『狭衣物語』の「たづぬべき」歌の影響であろう。

風葉集に採られ、歌合の判詞でも言及されるなど、広く人口に膾炙した歌である。この「たづぬべき」歌に「誰に問はまし道芝の露」とあることから、「道芝」「道芝の露」と「とふ」は強く結びつき、「道芝」「道芝の露」は問うべき相手、案内してくれるものの意味を担うようにもなる。『夜の寝覚』と『狭衣物語』の先後関係は明らかではないが、『風につれなき』『とはすがたり』の散文中に現れる「道芝」には、『夜の寝覚』と共に『狭衣物語』の「たづぬべき」歌も踏まえられているのかも知れない。

また一方、『夜の寝覚』『風につれなき』とはすがたり』の「道芝」は、しるべ、よりどころとしての『うつほ物語』の「道芝」につながっているように思われ、必ずしも『日記』の「おきある人」の表象としての「道芝の露」を介在させなくともよいのではないかと考えられるのである。

(注)

(一)『和泉式部日記』の引用は岩波文庫(底本三条西家本)による。応永本は女の返歌の二三句「露とおきある人よりも」、結句「袖はかかす」。これだと相手の宮よりも別れの悲しみは自分の方が深い、の意になるが、本稿の問題とする点には直接関わらない。

(二)『夜の寝覚』の引用は日本古典文学全集(小学館)による。

(三)総角や とうとう 尋ばかりや とうとう 離りて寝たれども 転びあひけり とうとう か寄りあひけり とうとう(催馬楽 呂「総角」)

(四)笠間書院、一九九九年。なお、角川書店刊の旧版(一九八三年)も同じ。

(五)東京大学出版会、二〇〇〇年

(六)歌語「道芝の露」については、伊藤博氏が『和泉式部日記研究』(笠間書院、一九九四年)、『和泉式部日記』の歌ことば「に、新古今集794・1187・1188・1788 歌、大式高遠集22歌、和泉式部集24歌を挙げ、この歌語を「逢い、別れたはかない逢瀬が具象化される」『和泉式部日記』の恋の世界にふさわしいことばといえよう」としておられる。(七)以下、和歌の引用は、特に断らない限り新編国歌大観による。

(八)『うつほ物語』の引用は、室城秀之『うつほ物語 全』

(おうふう、一九九五年)による。

(九)竹鼻續氏『小大君集注釈』(貴重本刊行会、一九八九年)はこの歌の「道芝の露」に注して、「道端に生えている芝に置く露。はかないものの譬えにいう。この語は本集以外では『大式高遠集』『和泉式部集』に用例がみえる程度で「道芝」の語も『小大君集』『好忠集』にみえるに過ぎない)、盛んに用いられるようになったのは新古今時代である。それだけに当時においては斬新な表現であったと思われる。」としている。

(十)目加田さくを氏『源重之集・子の僧の集・重之女集全釈』(風間書房、一九八八年)は当該歌と詞書を、「不案内な道の道案内をしてくれる人が別れてゆくところで／不案内な道を、道のべの草露を打払うて導いて下さる親切な貴方のことを、私はいつのよに忘れましようか、生きております限り、貴下の御志、忘れるものではございませんよ。」と通釈している。

(十一)なお、『枕草子』は「草は」の段で、「道芝いとおかし」と簡単に述べるが、前に「あやふ草」「いつまで草」「ことなし草」「忍ぶ草」を挙げた後に続いているところから、「道芝」に歌語としての認識があるうと想像される。

(十二)『狭衣物語』の引用は新編日本古典文学全集(小学館)(底本深川本)による。なお、内閣文庫蔵本も歌句に

異同はない。

(十三)「かの道芝の露も、このつらに思ふべきにはあらねど、見る目渚に思ひやはかけしなど」(狭衣物語巻二)、「道芝、いとあはれなり」(無名草子)、「ひかるげんじはふちなみにしづみ、さ衣の大将はみちしほの露にしほれ、五郎中将はすみかをさだめず、くにぐにありき給けり」(改作本夜寝覚物語二)など。

(十四)『空物語玉琴』では「道芝なかりしか」を「淵瀬もなかりし」とする。意改した本文かと思われるが、その場合は、深いも浅いもなかった——どうしようもなかった、の意であろう。「藤原の君」巻には、「幼き子に文を取らせ、淵瀬も知らせず」(深いとか浅いとかの事情も知らせず、強引に——どうしようもなく)責めさずるは、かしこきわざかな」とある。

(十五)『無名草子』には記載がないが風葉集には歌を探られていることから、風葉集撰進の文永八(1177)年以前に成立したと考えられる。一部散逸。引用は大槻修・田淵福子・森下純昭『木幡のしぐれ・風につれなき』(中世王朝物語全集6)(笠間書院、一九九七年)による。

(十六)引用は新日本古典文学大系(岩波書店)による。

(すがわら りょうこ・京都学園大学非常勤講師)